

注意事項

JのPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

とある魔術の幻想曲 ファンタジア

【作者名】

瑠璃色ss

【あらすじ】

『人的資源』の一件から約三週間が過ぎた一一月一九日。平穏な日常が帰ってきたと思った矢先、再び『グレムリン』が学園都市にやって来る。

『クヴァシルの蜂蜜酒』

第四位の『聖人』ロキ、『ワルキューレ』の長の名を冠すフレイヤ、そしてもう一人の黒小人フレーバルドの三人が、一口飲めば魔神と同じ力を得られるという靈装を完成させるためだ。

一方、上条当麻はインテックスに行きたいとせがまれ、第六学区にある大型遊園地『ファンシーパーク』に行く。

すると、打ち止めに連れて来られた一方通行や御坂美琴、冥土帰しの治療を受けていたミサカ10778号、そして『グレムリン』の連中なども来ていて……

不幸はいつも突然に

12月19日 午前6時04分

『人的資源』の一件から約一ヶ月が過ぎたある日の夜明け頃。

どこにでもいる平凡な高校生、上条当麻は病院のベッドの上にいた。

(う……ん……?)

寝る前に窓を閉め忘れたのか、初冬の冷たい風が上条の頬をなでる。

「……まだ6時か……」

時計を確認し、窓を閉めるために上条はベッドから起き上がった。

「う~寒い寒い」

窓を閉め、長時間開け放しにされていたらしく冷え切った部屋から逃げるようにベッドに潜り込み、睡魔に身を任せのように瞼を閉じる。

午前6時31分

(…………ん?)

上条が再び田を覚ました理由は至極単純。ふこにゃ、と腰のあたりに細くて柔らかくて温かい、人の腕に抱かれているような感触を捉えたからだ。

(まさか……いや、ここ病院だぞ……ッ!?)

上条は普段、学生寮ではコーチバスに鍵を掛け、浴槽の中で眠るところ生活を送っている。なぜなら寝惚けたとある居候娘が上条の布団に侵入してくるのを死守するためだ。

上条が入院している間その居候娘は、彼の担任であるマム女教師、月詠小萌に預かってもらっているはずなのだが……

「たしか小萌先生の家からここまでそつ遠くねえつ!!

彼女のお布団侵入癖 というより夢遊病 に頭を抱えつつ、上条はとりあえず腕の中から抜け出そうと試みる。

しかし、

「むがつ!?」

服を掴まれ再びベッドに引き戻される。

しかも今度は向かい合つ形で。

ただでさえ布団侵入罪は健全な青少年上条当麻の精神にとてつもない影響を及ぼすのに、今回は向かい合つてしまも抱きつかれているため無防備にイロイロな所が触れ、上条は精神に途轍もないダメージ

を『えられた。

「（うおおおおこちよつ、こつこくへい寝惚けてこゆとせまはく、わがヒコレサウトだら!!）」

上条は周囲の病室に聞こえないよう小声で と本人が思つているだけの結構な大声で 抗議するが、

「……………」

応答はなく、すりすり、と小さな寝息が聞こえてくるのみ。

（へへ、じつなつたら少しでも身の安全を確保するしか……ツー）

上条は無理に起き上がりとせず、ジリジリと体を動かし毛布の中の少女から離れていく。

すると、動く上条につられてか、毛布が取り払われ少女の姿が露わになつた。

そこには、

「むこう……この夢は星一つです……すう……・

フロイライン＝クロイトゥーネが眠つていた。

田の前、吐息がかかるほど近く

下着姿で。

「…………」

思考が停止する」と数秒、

「…………まつ!？」

我に返った上条は自身が今どういう状況にいるか自覚し、慌てて彼女の腕から脱出する。

「なつー・わっわわ、わっ痛!?

最後のはべツドからずり落ちて頭を強打したためである。

「なつ、えつ何? 寝起きドツキリ?」

頭を打ったからか、寝起きだからか、元々バカだから。変なことを弦く上条にベツドの上から声がかけられた。

『ああ、ようやく覚めましたか上条当麻』

「わつ、だつ誰!?

上条が起き上ると、ベツドの上に体長30センチほどの巨大な白いゴキ

『カブトムシですよ上条当麻?』

考えを読み取ったのか、軽く殺氣を放つゴキ……もとカブトムシは答えを先取りした。

「なつ何でここにいるんだ? しかもいつ生まれの…………

上条はカブトムシの殺氣に気圧され顔を青ざめさせながら、先程見た少女の姿を思い出す。

「……下着姿で……」

不埒な幻想を頭に過らせる上条だが、カブトムシは跡形もなく打ち壊した。

『私が屋内に入るよう勧めたのです。彼女も相当眠たかったのか、二〇の窓が開いていたので侵入するや、服を脱き散らかしてそのまま寝入つてしまつた。要するに偶然です。』

ビニに入ろうか考えていた時にAIMストーカーに似た『機能』でここに上条がいると分かつて入つた事や、眠りについたときの表情がとても穏やかで起こすのも憚られた事は、変な誤解を招くため、言わない。

「窓から? 二〇踏だぞ!」

そんなカブトムシの考えには気付かず、上条は驚いた様子で質問した。

『はあ……彼女なら造作もないことだと思いますよ? なにせ「四枚刃」を素手で壊し回つたほどですし。』

呆れたように言つカブトムシ。たしかにそんな事もあつたような無かつたような……。

「うん……朝……です、か……?」

一人の会話のせいか、フロアライン=クロイトゥーネが目を覚まし

た。纏めずに寢たのか、髪が素の肩にばねばねと掛けた。

『ああ、おはよひです。よく眠れましたか？』

「おはよひですカブトムシさん。今朝の夢はあまり美味しくなかつたです」

彼女はカブトムシをギュウシ、と抱きしめて挨拶をすると、

「おはよひです上条当麻さん。ベッドを借りさせてもらひました」

今度は上条に向かつて腕を広げながら近付いてきた。

「ちゅつ待てーちゅつと待つて！まさかお前、毎朝起きる時にこんなことやつひんの!?」

「はい、おはよひのハグです」

面食らひ上条をお構いなし、フロイライイン＝クロイトゥーネは平然と上条に正面から抱きつくる。

ひーいいつ！、と情けなく叫ぶ上条は自分の顔が火照つていくのが分かった。先程は毛布越しだつたが、今回は直で。しかも下着姿で抱き付かれているため、彼女の鼓動や体温、胸のふくらみの感触などがダイレクトに伝わってきて上条は心臓が止まるかと思つた。

「…………ん？」

一度の精神への甚大なダメージを受け、全身の神経がおかしな具合に逆立つ上条は、フロイライイン＝クロイトゥーネがいつまで経つても自分から離れないことに不安を覚えて顔を覗き込む。

あると、

「…………すう…………」

彼女は上条の胸に頭を預けて再び眠っていた。

「一度寝してゐたうう！」

上条は腕の中から抜け出よつとするが、後ろで組んでいるのかまつたく外れる気配がない。

「一体ビツすれば…………ッ!?」

『ああ、一度ベッドへ寝かしてあげれば良いのでは？ そつすれば自然に外れるかもしません。』

対処法に悩んでいると、カブトムシが少々不機嫌そうな声で助言した。

「あ、ああ……」

助言に従い、フロイライン＝クロイアウーネを抱つしする形でベッドに運ぶ。

「よひじりせつ、おわづ！」

彼女を下りそととした刹那、不幸にも床に落ちていた毛布に足を滑らせ、一人は折り重なるようにベッドに倒れこんだ。

「痛つ、つ……」

咄嗟にフロイライーン＝クロイトウーネの頭を守ったため、両手が使
えず顔面からベッドにクラッシュする上条。痛みに任せてのた打ち
回りひつしたが、田の前に少女の顔があることに気がつく。

両者の間の距離はおよそ4センチ。

キュバッ!!、と首を折りかねない速度で顔を逸らす上条だが、カブ
トムシの周りに殺伐としたオーラが漂ってきてるのは気のせいだ
らうか。

「むこう…………すう…………」

彼女は少しだけむづがると、上条から腕を離しそのまま眠り込ん
だ。

「ふう…………」

ようやく危地から脱し一息つくと、上条は床に転がった毛布を取り
上げる。

「…………いいじて見ると、やっぱただの女の子だな…………」

『……ええ、彼女も学園都市の子供たちと同じ。ただ特別な能力を
持つただけの人間です』

上条が呟くと、カブトムシが穏やかな声で返した。

和やかな空気が病室を満たし、上条がフロイライーン＝クロイトウー
ネが冷えないよう毛布を掛ける。

その時だった。

「といつまー時なんだよー早く起きとせーいかも!!」

その平穏を破るよ^ウズバーンー、ヒ勢によ^ヘ病室のドアが開け放たれた。

ビックウ!!、と体を震わせそのまま硬直する上条。ベッドとの間のカーテンで顔は見えないが、小さな人影がじちりに向かってするのが分かる。

(ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい……ッ!!)

厳密には6時45分だとか、朝っぱらから大声出してんじやねえとか、今はそんな事どうでもいい。

「グッズモーニングなんだよといつまー本田は快晴なりな、ん……だ。
よ……?」

今重要なのは、上条のベッドでフロイライイン=クロイトゥーネが寝ている事。その彼女が下着姿な事。上条が彼女の腿の辺りまで毛布を掛けてそこで止まつてこる事。

そして、

「ナレ」で何をやつてこるの、といつまー

シャツ、と小気味よく開けられたカーテンの向こうに立つてこるのが銀髪碧眼の白いシスターさんである事だ。

彼女の名前はインデックス。

現在上条の学生寮に居候をしている女の子だ。

「何をやつてこるの、ヒツモ?」

再び訊ねるインデックス。訊く度にアガアガアガシニ、と気迫が満ちてこくのは氣のせいではないだろう。

「イイイイイインデックスさん!!」ヒカルは色々と訳がありまして……

「何をやつてるの、ヒツモ?」

「」の子は深夜に窓から進入して私のベッドに潜り込みまして、何で下着姿かは彼女が自分で脱いだだけで私はなにもやっておりませんし

「何をやつてるの、ヒツモ?」

「つまり私は上条当麻は決して不埒なマネはしておしません!!」いや途中でちよつとドキッとした時もあったけどそれは結果であつて、とにかく私はひいいいいいつ!!

冷や汗と弁明を垂れ流しながら土下座モードに移行してこく上条。最後のは、インデックスがガシッ、と両手で上条の頭を持ったからである。

「…………ヒツモ…………」

とても低一い声が発せられる。俯いていて表情は見えないが、口か

ら覗く歯がギリギリと輝いていた。

「なつなんどうじまつか姫？」

上条が恐る恐る尋ねる。

「前に、これと同じような夢を見た気がするんだよ。」

「は、はあ……」

「その時は、とつまほそんな節操無じじゃなって思つたんだけど

……

インテックスは一度言葉を切り、顔を上げる。

彼女の顔には笑顔があった。

奥にいつ噴火してもおかしくないマグマのような怒りを秘めた笑顔が。

「やつぱつといつまほ、とつまなんだね？」

直後、猛獸と化した白いシスターさんに、分厚いステーキを噛み切るかの如く頭を噛み付かれた。

不幸はいつも突然に 其の貳

午前7時15分

第七学区にある警備員用のマンションで

「不味イ……」

学園都市第一位の超能力者^{レベル5}、一方通行^{アクセラレータ}はコーヒーを淹れていた。

普段はコンビニで気に入った缶コーヒーをまとめ買いし、飽きたら別のを買づ。という超金の無駄遣いをしているのだが、こここの家主である黄泉川愛穂から『冷蔵庫がパンパンになるからダメじゃーん』と禁止され、もう一人の同居人である一ート科学者から『あら、ちょうど福引で当たったからコレ使えば?』とコーヒーサーバーを渡されたため、仕方なく自分で淹れているわけだが……

「なんだコレ、ふざけてンのかア?」

びつやうお氣に咎もなかつたらしく、少々不機嫌な^ジ様子だ。

「おはよう一方通行。びつやのコーヒーサーバー?」

不味いコーヒーにミルクを入れて啜つていると、ロビングのドアが開き一ート科が……もとい芳川桔梗が入ってきた。

「よオ芳川。ダメだコレ、ビニのチンケな喫茶店のより酷エ味だ。」

「そり…最新鋭!、とか書いてあつたけど……豆が悪かったのかし

「ら？」

「豆はアフリカ産からの直輸入モンだ。多分サーバー本体が原因だな」

「…………まあ福引で当たったんだし、使えればいいんじゃない？」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、投げ遣りに返す芳川。福引で当たたのは彼女だが、少しばかり無責任ではないだろ？

心中でそう思つ一方通行は、ふと彼女が今朝はスーツ姿なことに気が付く。

「どうか出掛けんのか？」

「ん？ ああ」と芳川が言いかけるとガチャリ、と再びドアが開いた。

「おはよう、つてミサカはミサカは朝の挨拶をしてみたり…………」

「おはよう^{ラストオーダー}最終信号。今朝はめずらしく早起きね」

入ってきたのは打ち止めと呼ばれる見た目五歳くらいの少女だった。

「おはようヨシカワ、つてミサカはミサカは挨拶を返してみる
…………ふあ～～～」

まだ眠いのか、打ち止めは瞼をこすりながら一方通行のとなりへボスン、と身を沈めるよしひに座る。

「飲み物がほしいかも、つてミサカはミサカはあなたのミルク

「ティー」手を伸ばしてみたり

「バカ、おまえそれは……ッ!」

寝起きでのどが渴いた彼女は一方通行の前に置かれたカップを取り、制止の声を気にせずカップの中身を飲み込み、そしてそのまま静止した。

「ハア……

言わんこっちゃないとばかりに溜め息をつく一方通行。ゆっくりとカップを下ろした打ち止めの顔は、先程までの寝ぼけた表情は消し飛び、代わりに今にも泣き出しそうな表情になっていた。

「……なに、コレ」

そのまま固まる」と数秒。すべての文字に濁点がつくよつな声でようやく呟つ。

「コーヒーだバカ。紅茶じゃねエ」

「まったく。ほら、これ飲になさい?」

涙目でフルプル震える打ち止めに、芳川が牛乳を注いで渡した。

「あつがといシカワ、つヒサカはミサカはお礼を言つてみる

「ハア……なんだか忙しい一日になりそうね……」

芳川はそう言って窓の外を眺める。

今朝は雲一つない快晴。

それぞれの朝 其の壱

「まったく、傷を癒すために入院しているところのこ、何で君はまた傷がひとつ増えているんだい？」

「いやその…まったくその通りです。ハイ……」

午前8時46分

今朝の一件で頭にまた一つ大きな噛み傷を負った上条は、診察室でカエルに似た顔の医者に咎められていた。

「本当にひとつまはお騒がせ者なんだよ。お見舞いに来てあげた人の気持ちにもなつてほしいかも」

「噛み付いてきた張本人が言つ口詞じゃ いえ、なんでもございません」

斜め後ろに座るインテックスにも責められ反論しようとするが、彼女の口からギラついた歯が覗いたため、即座に撤回する。

「それで、どんな具合ですか？」

「うん…経過は良好、といつ感じだね」

パソコンを操作して何やら体の断面図のよいつな画像をいくつか見ると、カエルに似た顔の医者は頷き、

「これなら退院しても問題ないかな」と続けた。

「えっ!? 今日退院できるの?」

すると、何故かインデックスが身を乗り出して聞き返した。

「うそ。今日退院できるよ。でも、一 つ忠告させてくれ

田を輝かせて尋ねるインデックスに返事をしつつ、カエルに似た顔の医者は上条をじっと見つめる。

「くれぐれも、絶対に、無茶はしないこと。分かつたね」

いつものふざけたような上がり調子ではなく真剣な声に、少々驚く上条は「クククと頷く。

「あ、ああ。保証はしかねるけど……」

困ってる人を見れば老若男女・親交の有無・自身の危険一切不問で助けに行く男、上条当麻はそう返事をした。

そんな彼の性格を理解しているカエルに似た顔の医者は、困ったようには息を吐く。

「ふう…まあ、これで何度言つたか忘れたけれど言つておへよ。退院おめでとう、上条当麻君」

「おつむせ話になりました」

彼は笑顔で一人を見送った。

午前9時28分

「ふんふんふふ～ん」

寮への帰り道。インデックスは上機嫌に鼻歌を歌っていた。

「.....」

今朝とは打って変わった彼女の態度に嵐の前の静けさのような雰囲気を感じ取った上条は考えをめぐらせる。

(.....今日退院できるって分かつた途端にこうなった.....ってことは今日なんか大切な日だととかか?.....ハッ!? まさかコイツの誕生日か!? ヤバイ、プレゼントなんて何も用意してねえぞ.....ツ!!)

考え、勝手に窮地に追い込まれていく上条は、ふと前を歩いていたインデックスが立ち止まつた事に気付いた。

「どう、どうしたインデックス?」

「ねえねえとつま。今日つて一日中暇なの?」

「!? まつ、まあ、急に退院が決まったからな。暇かつて言われたら

暇だけど……

何でだ？、といきなりの質問に冷や汗をたらしながら訊くと、彼女は修道服の袂から一枚のチラシを取り出した。

「実はコレに行ってみたいんだよ!!」

「ナーナー…『ファンシーパーク^{クリスマス}降誕祭乗り放題フェスタ』ア？」

そこには、学園都市で唯一、遊泳施設や遊園地などの娯楽施設が所狭しと存在する第六学区の中でも一際巨大なアミューズメントパーク『ファンシーパーク』で、入場料のみで乗り放題のイベントがあるということが記されていた。

「『ファンシーパーク』ねえ……」

実はこの『ファンシーパーク』。以前『ゴールデンウイークに青髪ピアスと土御門との野郎三人でいたことがあるらしく、『ファンパー』という略称でクラスの中でも結構人気があつた。

上条本人からすると、八月より前の記憶を失つてしているため、『ファンパー』という略称の意味が分からぬまま話題を口わせようとして色々と苦い思い出があつた。

(……遊園地、か)

また、『遊園地』という場所を『囲いこまれ管理された自然の中に、遊戯 機械 施設 食堂 売店などを配し、各種の催事やアトラクションを提供する屋外型娯楽施設。』と『知識』としては理解しているものの、『ジェットコースター』や『「ヒーハップ』などがどういった物なのか『思い出』が無いためわからないのだ。

(たしか吹寄が「一ヶ用」というアトラクションが変わって飽きずに向回行っても面白ことか言つたつナな)

「ねえ良いでしょとつま?』『1~1日から25日までの一週間は園内にある全ての屋台の食べ物が無料』みたいだし絶対樂しいと思つんだよ!!」

「お前は屋台で食べる』とが目的なのかッ!?

花より団子とさせにこいつ事を指すのだ!」

(……まあ、最近『グレムリン』や『インセイ』や『アーリー』で色々あつたし、息抜きするには丁度良いか。ついでに遊園地がどういう所なのか知つておきたいし……)

「……行くか『ファンシーパーク』

「ほんとに!? そつと決まれば今すぐレッツゴーなんだよ!!

「ちよつ、待てインテッククス!」

見当違ひの方向に駆け出すインテッククスを追いかける上条。彼は目的地の位置を確認するためにチラシ用紙を走らせる。

すると、地図が掲載された欄の上に小さく載せられた入場料が目に入った。

「ん? 入場料金…………」

「……たべると食べとけよインパックス……」

じつやうの明日からの食事は塩と水だけになりそうだ……。

それぞれの朝 其の貳

『実はコレに行つてみたいんだよ!!』

『ナーナー…』『ファンシーパーク降誕祭乗り放題フェスタ』ア?』

午前9時30分

上条とインデックスが話をしているとき、

(へつ、へー……あいつファンパー行くんだ……)

『超電磁砲』の異名を持つ学園都市第三位、御坂美琴は電柱の陰で口ソコソ一人の会話を聞いていた。

『人^{アジテート}的資源』の一件を無傷でくぐり抜けた彼女は、いまだに上条が入院していると耳にして、『この前のお見舞いで手作りクッキーがどうだこうだ言つてたし、作つてみよっかな……』と思い立ち、白井黒子からあの手この手で逃げおおし、やつとの思いで彼の入院先であるリアルゲコ太の病院にたどり着いたのだが、

「ああ御坂君だね？　お探しの上条当麻君ならさつき退院したよ？」

「……へ?」

という具合に入れ違つてしまつたため『なら、退院祝いと称してあいつの家に乗り込もう……ツ!!』と駆け出した3分後、道半ばで遭遇し現在に至るわけである。

(もしファンパーで偶然会ったことにしても、つまらぬ子を引き離せられれば……ほかに何ひとつもないと無口チャンス!)

「 ハハハ……、と人に見せられなによつた顔で善からぬ事を企む美琴。

『 お姉ちゃん、あのんなこやついるの~? 』『 しつー見つけダメ! 』、
と道を歩く人々に見られてこるのも気付かず、話合ひ一人を観察し続ける。

セーヒ

『 あつ! 見つけましたわよお姉さま
ああああああああああああああああああああ!!! 』

と、頭上から声が掛けられた。

「 うわー! 」

ビックウ!? と肩を震わせる美琴は頭上を見上げる。しかしそこに声の主はおりず、青々とした冬の晴れ空だけがあった。

「 まつたくお姉さまつたら、私を置いてきぼりにしてじぢりへ向かつたと思つたら、こんな所で何をやつてこるのでござれこめすの? 寮監が探しておりますわよ? 」

再び声を掛けられ田線を下へ戻すと、二つの間にカルームメイトの白井黒子が胸に抱きついて来ていた。

「 へつ黒子ーなななな何でこなとこなるの? 」

「それは私のセリフですのお姉さま。何度も言わせないでくださいな。寮監が貴女をお探しです。何か多層陸橋の請求書がどうのとか言っておりましたけど……」

「ああ。あの時のことって、えつ？あれの請求書が来てんの!?」

たしか『一端覧祭』の時に1ブロックとかふつ飛ばしたり、橋げたを壊して下の道路と繋げたり、一部料理べたが大根と格闘したように切斷されたり、とにかくボロボロにされたあの橋である。

「？まあ、細かいことは寮監に聞いてくださいまし。とにかく彼女にチヨークスクリッパーをキめられる前に帰りますわよ」

あわあわと取り乱す美琴の手を握る黒子。一秒後、一人は虚空へと消えた。

それぞれの朝 其の参

午前9時43分

一方通行・芳川桔梗・打ち止め^{ラストオーダー} アクセサリーフレーティ三人は少し遅い朝食を食べていた。

「あれ、ヨミカワは?、つてミサカはミサカは芳川に尋ねてみたり」「彼女なら深夜遅くに仕事に行つたわ。何か緊急の用事が入つたみたい」

「ふーんヨミカワも大変だね、つてミサカはミサカは徹夜の影響によるお肌の老化にしみじみしてみたり」

本来、この家には番外個体^{ミサカワースト}という田付きの悪い少女も住んでいるが、一日一日帰つてこないのはザラなので気にしない

「それで、オマエは今日出掛けんのか?」

「ええ、前に色々と面倒事を起しじっちゃつてね。その始末書を出しに冥土^{ヘンソキヤンセラ}歸しの所へ行くわ」

そう言つて彼女はファイルをヒラヒラ振つた。すると、その間から何やら細長い紙が落ちてきた。

「ん?なんか落としたよヨミカワ、つてミサカはミサカは親切に落ちた物を拾つてあげてみたり……えーっと『ファンシーパーク』招待券?、つてミサカはミサカは首を傾げてみる

横に座る打ち止めが拾つと、それはチケットのようだつた。

「あら、ここなどに紛れ込んでいたの。愛穂から貰つたけど……たしか期限は今日までだったかしら？」

「ねえねえヨシカワ。ファンシーパークって何なの?、ってミサカはミサカは質問してみたり」

「第六学区にある巨大な遊園地よ。行つたことはないけれど、学生の間では人気らしいわ」

「ミサカ遊園地行つてみたい!、ってミサカはミサカはお願いしてみたり!!」

「行つてみたいって言われてもねえ。私は今日忙しいし、愛穂も仕事だから……」

言つて打ち止めと芳川は同じ方向に田線を向ける。

「………… オイ、二人して俺の顔を見るンじゃねエ」

「ねえお願ひ!、「駄目だ」ってミサカはミ「却下する」サカはあなたに上「無理だ」且遣いで「諦めろ」って言つてる途中に4回も否定されたのは初めてかも!!、ってミサカはミサカは涙目になつて抗議してみたりーうえーん!!」

「………… 泣かせちゃつたわね一方通行」

「なつ!くつ……わかつた、わかりましたよ仕方ねエ。連れてってやればいいソンだろ!」

「うえ、ひつぐ……ほんとに?」

「あア、冬用のブーツが入用だつたからな。併設してゐるモールで買つてこでに氣に入つたモノに乗ればいいだら」

「あれ？ たしか『一端覧祭』の時に買つたはずじゃ……」

「口と舌とアゴをすり潰されたくなきや黙つてわ」

「…………」

「本当に連れてつてくれるの？」 つて//サカは//サカは念を押して確認してみたり……ひっく……」

「ああ、だから泣くんじゃね」

そう言つと一方通行は打ち止めの躊躇に動き、頭を撫でた。

すると打ち止めは不自然に腕を体の後ろにやると俯いてコクコクと小さく頷いた。

「………… オマエ、手に持つてるモノを出してみる」

「え、えつ、一体何のことか分かんない、つて//サカは//サカはとぼけてみたり。それより何時から行くの？」 つて//サカは//サカは話題を変えてみる

一方通行の手から逃れようと必死にかわし続ける打ち止めだが、体格差などから勝ち田など無く、あっけなく手に持つているものを取られてしまつ。

「…………」「レは？」

一方通行が取り上げたのは田薬だった。訊かれた打ち止めは田を逸らすと動搖した声で答える。

「わ、さあ。ミサカ分かんない、ってミサカはミサ痛いっ!!、ってミサカはミサカは突然のチョップの連撃に頭を押されてみたり!?」

ビシッ、ビシッ、と打ち止めに制裁を加える一方通行。その後何回か戻ると手を止め、疲れたように溜息を吐いた。

「ハア……11時には出るからそれまでには用意しどけ」

「いえーー!!、つてミサカはミサカは両手をあげて今の喜びを表現してみたりつ！ 番外個体から教わった腹芸が役に立つたぜ、つてミサカはミサカはほくそ笑んでみ痛いつ!?」

番外個体にはどうこう制裁を加えてやろうか。そう考える一方通行であった。